
コトノハ

桐原 さくも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コトノハ

【Nコード】

N2468F

【作者名】

桐原 さくも

【あらすじ】

声は目覚めた彼のことを“コトノハ”と呼んだ。淡い世界のなか、コトノハによって紡がれる、何かを探す物語。

空をつかもうとするかのように枝を伸ばし、つややかな若葉を茂らせる『大きな樹』。その下に、彼はいました。

目覚めた彼は、何回かまばたきをして、手の甲でこしこしと目をこすります。

「ボクは……ダレ？」

彼が呟くようにそう言うと、どこからか声が聞こえてきました。

“あなたの名前はコトノハよ”

その答えに彼は少しむっとした顔をします。

「ボクが知りたいのは、名前じゃなくて」

声がどこから聞こえているかもわからず、彼は続けました。

「ボクが、一体何なのかということなんだよ」

すると、くすくすと鈴のような笑い声が空気を震わせます。続けて聞こえてきたのは、先ほどの声でした。

“あなたが何なのか？ それはひどくおかしい質問ね。あなたはコトノハよ。それ以外に何だと言うの？”

彼——コトノハは、腕を組んだり、頭を抱えたりして、しばらく考えた末に答えました。

「わからないよ」

そんなコトノハに、“それなら”と声が言います。

“それなら、走るといいわ。何だかわからない時は、走って一本の道を作るの”

そうなの？ とコトノハが尋ねると、“そうよ”と声が笑いしました。

知らずのうちにコトノハは立ち上がり、ふらりと一步を踏み出していました。まるで、何かに誘われるように。

何だか少し不安になって、思わずコトノハの口から言葉がこぼれます。

「この樹をでるの？」

“そう、出るのよ。この樹は『思考の根っこ』だから”

声がそう言うと、さらにコトノハの足は歩み始めます。樹の陰から出ると、あふれんばかりの光が彼を迎えました。葉っぱたちはさやさやと歌い、目の前に広がる草原は、彼を招くようにさざめいています。

“さあ、走りましょ。今この一瞬も、無駄にしてはダメ”

声の言葉に、コトノハはためらいなくうなずきました。樹の外はとても綺麗で、きつとこの向こうにはもっと綺麗なものがある。そんな気がしたのでした。

今度は自分で駆け出そうと、とんと地面を蹴ります。しかしふと気にかかったことがあって、立ち止まって口を開きました。

「キミは、ダレなの？」

“私？ 私は――”

どこか悪戯っぽい声は、風に流されてしまいました。

□ □ □

コトノハは、樹の下から草原の中を、一直線に駆け抜けていきました。

息を吸うと、草のつんとした匂いがします。お日様の光はぼかぼかしていて、まるで誰かに抱っこされているようでした。何だか嬉しくて、幸せで、コトノハは弾むように進んでいきます。彼の走った跡は、まっすぐな白い道になっていました。

「ここはどこなの？ この道は何？」

空を見上げてコトノハが尋ねると、どこか呆れたように返事があります。

“あなたは尋ねることが好きね”

それでも声はふふと笑って、優しく教えてくれました。

“この原っぱは『考えの海』。考えが浮かんでは消える場所。あれ

は『はじまりの道』よ”

ふうん、とコトノハは答えると、少しゆっくりと歩きました。両手を大きく広げ、気持ち良さそうに目をつむります。

“気持ちいいの？”

声が問いかけると、コトノハは大きくうなずきました。

「うん、とつても」

満足したようにコトノハはそう言って、またとんとん、たんたんと地面を蹴っていきます。

その先には、きらきらと光る何かが見えました。

□ □ □

そこにあつたのは泉でした。

光を弾いて透明なきらめきを放つそこには、淀むことなく水が溢れています。

かげりのない水にそつと触れると、波紋が広がって行きました。ふるふると揺れる水面を見て、コトノハの心もとくと震えます。こんなに綺麗なものを、彼は見たことがありません。

心地よい冷たさが指先からすうっと伝わって、コトノハのほてった身体を冷やしてくれました。

「ねえ、これは何？ ここはどこ？」

“この透明なものは水。ここは『心の泉』っていうの。想いがとりとめなくあふれる場所。綺麗な想いは澄みきった水になって、花を育てるのよ”

はな、とコトノハは呟きます。とくとくと彼のどこかがなっています。まるで、急かすように。それがどんなものか知らないはずなのに、何故だか知っている気がしました。

“花はね、贈るためにあるのよ”

どこか弾んだ口調で声が答えます。

“贈るための花があつて、受け取る人がいて。だから風は吹くし…

…あなたがいるの”

ボクが？ とコトノハが首をかしげると“そう！”と声は言います。

“いきましょ、花畑に。泉も綺麗だけど、花は一番綺麗だから”

その言葉にきらきらと目を輝かせて、コトノハは「うん」と答えて走り出しました。

□ □ □

うわあ、と思わずコトノハは声を漏らしました。彼の前にあるのは、花の海。色とりどりの花たちが、踊るように揺れています。時折風に乗った花びらがひらひらと宙に舞っていました。

“綺麗でしょう？”

自慢げな声の言葉に、コトノハはこくこくと何度も首を縦に振ります。そして、ぱつと上を見上げました。

「それに、それにね。キミが、見えるよ！」

空の色、お日様の色、色づいた肌の色。淡い色をした花びらが、声のするその場所に渦巻いていました。嬉しくてたまらないようにコトノハは言います。

「風だね。風なんだね」

“そう。私は風。あなたを運ぶためにいるの”

花びらが形作る風の姿は、コトノハの形とよく似ていました。そんな風を見上げていると、いざなうように、花びらで形作られた手が差し出されます。

“さあ、花畑に入りましょ、コトノハ。きっと見つかるから”

コトノハは一瞬きよんとして「何が？」と尋ねます。風がふふと笑いました。

“あなたの探しものよ”

行きましょ、と風がまるでドレスのように花びらを揺らして言います。コトノハはそつと風の手を掴んで、たくさんの花が咲く鮮や

かな海にわけ入って行きました。

ほんのりとした甘い香り。優しく頬を撫でる花々。くすぐったくて、けれどもどうしようもなく気持ちよくて、コトノハは夢中で花々の間を走り回りました。

“探しものを見逃さないでね”

風がコトノハの耳元で囁きます。そして、そつと付け足しました。
“まあ、大丈夫だと思うけれど。あなたはそれを見つけるために来たのだから”

□ □ □

「見つけた！」

あたりにコトノハの嬉しそうな声が響き渡りました。

風が吹きよると、コトノハはその手に一輪の花を持っていました。そよそよと揺れる花は、決して目立つ色や形をしているわけではありません。しかし、その花の香りほどの花よりも優しく、花びらはたおやかでした。その花と満足げなコトノハを見つめ、風も思わずほほえみます。

そんな風に、コトノハが言いました。

「不思議だね。ボクが探していたんじゃないくて、誰かが探しているような気がするんだ。呼ばれたみたいだに『それだよ』って言われた気がする」

そつでしうね、と風は答えます。

“コトノハ、前を見て”

コトノハが顔を上げると、そこには彼がここまで印してきた道と似ている、それでいて覚えのない道がありました。その先には、温かい、大きな光が燈っています。

「あれは……？」

“『はじまりの道』よ”

でも、と納得のできない顔をしてコトノハは風を見上げました。

「ボクが引いてきたものとは違うよ？」

すると、風はコトノハの顔の前に降り立って、そつとその頬を花びらの手で包み込みました。そして、言い聞かすようにゆっくりと言いました。

“そうね、もしかすると『おわり』なのかもしれない。でも、それも正しくないの。外に出たらまた新たに始まるのだから”

「そと？」

“そう。外はあなたを呼んでいる。あなたは行かなくちゃいけない。待っているひとがいるから。……わかる？”

うん、とコトノハはうなずきますが、どんどん不安になってきました。

あの光の先には、なにがあるのでしょうか。この花畑以上に綺麗な場所なのでしょうか。違うかもしれません。恐ろしいところだったら、どうすればいいのでしょうか。

考えるほど怖くなって、ぎゅっと花の茎を握りしめます。何故だか視界がぼんやりとして、思わずまばたきすると、ぽろりと何かがこぼれおちました。それは、先ほど風に教えてもらった『水』でした。

“泣かないで、コトノハ。怖くなんてないから”

苦笑するように、風が言います。「違うの」とコトノハは答えました。

この先に何があるかわからない不安より、彼の心を占めるのはひとつのこと。

「キミは？ お別れなの？ もう会えないの？」

風が、はっと息をのんだような気配を感じました。しかしその気配は苦笑に変わって、そつと花びらがコトノハの『水』を拭きます。

“あなたは、尋ねることが好きね”

少し呆れたように、それでも優しく。

“またあえるわ。私はどこにでもいるから”

本当に？ とコトノハはなおも尋ねます。“本当よ”と風は答え

て、コトノハの身体を道の先——光の方へと向けました。

“ やつと見つけて摘んだ花を、決して離さないで。迷子にならないよう、まっすぐに進んでみて。外には君を待っているひとがいて、それを届けるのがあなただから。ほら『涙』を拭って”

とん、と風はコトノハの背中を押しました。

“ さあ——いつてらっしゃい”

手の甲で『涙』を拭って、コトノハは風の方へと振り向きます。少し眉を歪めて、それでもゆっくりゆっくりと表情を和らげて、最後にはにっこりと笑いました。

「また、あえるよね」

風もふんわりとほほえんで、コトノハのひたいにそっと口づけて言いました。

“ ええ、またあえるわ。コトノハ”

光が、コトノハを包みこみました。

□ □ □

光のなかに一歩踏み出すと、世界はまっしろになりました。けれどまぶしいわけではなくて、どちらかというとやわらかい光にふんわりと包まれているような気がします。

コトノハはただまっすぐ、光のなかを進んで行きましたが——ふと立ち止まり、振り返りました。そこに見えるのは白い色だけで、草原の緑も空の青も見えません。

少し心細くなって、コトノハはそつと目を閉じました。すると、ざわざわとあの大きな樹の葉がざわめく音が聞こえた気がしました。

思わず、とくとんと心臓が鳴りました。それはあの泉の水に触れた

ときの感覚によく似ています。

ゆつくりと目をあげると、一瞬ひとすじの風がコトノハの頬をなでていきました。鼻をくすぐるのは、ほのかに甘く、やさしい花の香りです。

声が、聞こえました。

“ほら、あなたを待っているひとがいるわ”

その言葉にはっとして、コトノハは手に持った花をきゅっと握りしめました。

そして前を向いて、走り出します。

この花を待っている、誰かのもとへと。

□

□

□

さあ、口を開いてみて下さい。

それは、現実で見ればほんの一瞬のことです。

あなたは少し照れくさくて、恥ずかしかったけれど、それでも伝えたくて、口を開きます。

ふわりと風が吹いて、口から出たその言葉は、呼ばれたようにすうっと相手の耳へとすいこまれていきます。

長いようで、それもほんの一瞬のこと。

その言葉は、飾り気のない言葉です。

でもその言葉は優しく、少しくすぐったくて、なにより心地よい言葉。

その言葉が届いたそのひとは、きつと笑っているはずです。

春の日差しのようにやわらかく、あたたかい顔で――

あなたの心に咲く花が、やさしく綺麗なものでありますように。

（後書き）

この作品は二年前、私が中二のときに執筆したものです。今でも、物語を紡いでいく、コトノハをつくりだす作業は、この世界で行われていると思っています。

貴方の言葉の世界に、コトノハと風が笑う場所があれば、嬉しい限りです。

読了、ありがとうございます。もしよろしければ、評価等よろしく願います。

2009・12・20

加筆修正しました。少しでも読みやすくなっていれば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2468f/>

コトノハ

2010年12月30日02時06分発行